

第 26 回大会

日本リハビリテーション連携科学学会

～ 人々の QOL と健康に豊かさをもたらす多職種連携 ～



作画 ひかる

会期 2025年

3月15日(土), 16日(日)

会場 東京医療学院大学

東京都多摩市落合 4-11

大会長 吉井智晴

東京医療学院大学保健医療学部 教授

実行委員長 内田達二

東京医療学院大学保健医療学部 准教授

大会 HP <https://rehabenkei26.gakujutsuweb.net/>

プログラム 大会長基調講演、特別講演、シンポジウム、口述・ポスター発表

市民公開講座 眠りは健康の根幹！おすすめしたい快眠8ステップ（講師 岡島 義 先生）

プログラム等の
詳細はこちら



プログラム

●大会長基調講演

テーマ：人々のQOLと健康に豊かさをもたらす多職種連携

講師：吉井 智晴（東京医療学院大学）

座長：大森 圭貢（湘南医療大学）

●特別講演 I

テーマ：対人支援に活かす応用行動分析：療育、教育、福祉、リハビリテーションとの連携と実践

講師：山本 淳一（東京都立大学）

座長：鈴木 輝美（東京医療学院大学）

●特別講演 II

テーマ：Well-beingを支えるソーシャルアクション：女性支援法成立の経緯とその意義

講師：堀 千鶴子（城西国際大学）

座長：豊島 雪絵（東京医療学院大学）

●シンポジウム

テーマ：市民と医療系大学の健康実践・教育・研究 コミュニティアクション

パネリスト：影近 卓大（合同会社ライフイズ・一般社団法人Life is）

神田 ゆりあ（当事者）

木村 奈緒子（東京医療学院大学）

新堀 貴子（一般社団法人ゆめまるエデュケーションデザインイェナスクールゆめまる 代表）

渡邊 江身子（みんなのリバティアー）

スーパーバイザー：堀 千鶴子（城西国際大学）

座長：豊島 雪絵（東京医療学院大学）

●市民公開講座

テーマ：眠りは健康の根幹！おすすめしたい快眠8ステップ

講師：岡島 義（東京家政大学）

座長：吉井 智晴（東京医療学院大学）

●学会企画セミナー

テーマ：すべての子どもたちへ、こころに残るワウワクドキドキ体験を届けよう

講師：安田 一貴（笑顔の向こうに繋がる未来プロジェクト PLAY&PHOTO Studio,

NPO 法人 laule'a 遊びリパークリノアたまプラ）

座長：田中 千恵（横浜リハビリテーション専門学校）

●ラウンドテーブル（ハイブリッド形式）

テーマ：Telerehabilitation と多職種連携の可能性を探求する

講師：小河 周平（特定非営利活動法人日本テレ・リハビリテーション研究所）

第26回大会 日本リハビリテーション連携科学学会



3.15(sat) TIME TABLE

メイン会場
W104

ポスター会場
W106 W107
W108

9:00



準備中



10:00

開会式

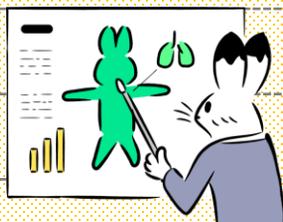
10:10-10:50 大会長 基調講演

『人々のQOLと健康に豊かさを
もたらす多職種連携』吉井智晴先生

11:00-12:00 特別講演 I

『対人支援に活かす応用行動分析学:療育,教育,福祉,
リハビリテーションとの連携と実践』山本淳一先生

12:00



ポスター
セッション
12:40-13:40

14:00

13:50-14:50

口述発表 I

15:00-16:00 市民公開講座

『眠りは健康の根幹！
おすすめしたい快眠8ステップ』岡島義先生

16:00

16:10-17:10 ラウンドテーブル (ハイブリット開催)

『Telerehabilitationと多職種連携の可能性を探求する』
SIG Telerehabilitation研究会

ラウンドテーブルの参加は
事前申し込みが必要です(3/1まで)



第26回大会 日本リハビリテーション連携科学学会



3.16(sun) TIME TABLE

メイン会場
W104

ポスター会場
W106 W107
W108

9:00

9:00-10:15

日本リハビリテーション
連携科学学会総会

10:00

10:30-11:20

口述発表Ⅱ

12:00

11:30-12:30 学会企画セミナー

『すべての子どもたちへ、こころに残る

ワウワドキドキ体験を届けよう』 安田 一貴先生



14:00

13:00-14:00 特別講演Ⅱ

『well-beingを支えるソーシャルアクション

女性支援法成立の経緯とその意義について』 堀 千鶴子先生

14:10-15:40 シンポジウム

『人々のQOLと健康に豊かさをもたらす多職種連携

ー市民と医療系大学の健康実践・教育・研究

コミュニティ・アクションー』

座長：豊島 雪絵先生 スーパーバイザー：堀 千鶴子先生

16:00

閉会式

POSTER

ファミリー休憩室

車椅子利用者向け休憩所のご用意があります！

利用をご希望の方は、事前にメールにてご連絡下さい。
運営スタッフより、必要な環境・物品を確認いたします。

大会長基調講演

人々の QOL と健康に豊かさをもたらす多職種連携

東京医療学院大学

吉井 智晴

この大会テーマには、リハビリテーション専門職は、人々の QOL と健康に豊かさをもたらすことに貢献できること、更に支援される人、する人の区別なく「お互い様」の精神で行う地域での多職種連携は、そこに関わる全ての人の well-being (ウェルビーイング) に繋がる可能性をもつ、という思いを込めた。

健康日本 21 等のヘルスプロモーションを中心とする健康施策において、一次予防重視は知られているところであるが、今までそれは保健師が主に担うという考え方だった。しかし、現在主に三次予防を受け持つリハビリテーション専門職がゼロ次予防、一次予防として貢献できるポテンシャルは高いと考える。また、社会参加と健康や要介護状態との関係、世代間交流による健康効果や生きがいの創生については様々な先行研究が行われている。

リハビリテーションが目指すものは、「その人らしい生活を送ることができる」ことである。その人らしい生活とは、様々なライフステージの中で変化するものであり、かつ、その人を取り巻く人と社会との繋がりの中で、達成されていくものと言える。したがって、人がその人らしく健康であるためには、社会も健康であり、それが人々の豊かさや幸せに繋がっていく。

本講演では、リハビリテーション専門職の well-being (ウェルビーイング) への貢献、地域での様々な多職種連携の実践についてまとめ、その可能性を更に広げていくための課題について整理する。また、本学会開催を契機として、本学を中心とした地域での新たな活動を生み出す機会として繋げていきたい。

【略歴】

東京医療学院大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻教授。

聖マリアンナ医科大学病院、正吉福祉会で臨床経験を積み、専門学校東京医療学院専任教員を経て、現職。理学療法士、専門理学療法士(地域理学療法)、社会福祉士、キャリアコンサルタント、認定スクールトレーナー。あらゆる世代の健康づくりにおける多職種連携のありかたを探求中。

特別講演 I

対人支援に活かす応用行動分析： 療育，教育，福祉，リハビリテーションとの連携と実践

東京都立大学
山本 淳一

応用行動分析学 (applied behavior analysis: ABA) を活用した対人支援は、ひとつの領域に限らない、ヒューマン・サービスのプラットフォームです。私は、応用行動分析学の専門家として、保健、福祉、保育、子育て、発達支援、学校教育、精神科臨床、リハビリテーション、看護、高齢者支援などの専門家や家族と協働することで、実質的な成果をあげてきました。本講演では、それら多様な領域の専門家とどのように協働してきたか、それを実現するために必要なことは何かをお話しします。

応用行動分析学では、常に「個人と環境との相互作用」の分析をして、その結果に基づいて、支援を行います。全ての支援に共通することは、①適切な『行動 (Behavior: B)』に焦点を当て、それを増やす技法を導入します。②適切な行動を引き出すために、見通しを与え、動機づけを高める工夫をします。行動の前の支援方法なので、『先行刺激 (Antecedent stimulus: A)』と言います。③適切な行動が引き出されたらすぐに、ほめる、認める、達成感を得させるなどのかかわりをします。行動の後の支援方法なので、『後続刺激 (Consequent stimulus: C)』と言います。この ABC を繰り返し経験してもらうことが、支援の中心です。

このようなシンプルな支援方法が、適切な行動をどのように増やし、不適切な行動をどのように減らすか、具体的事例をあげながら、解説します。今日から、応用行動分析学を活用してみようと思っただけで、本講演の目的です。

【文献】(「researchmap 山本淳一」で検索してください。

小関俊祐・大石幸二・嶋田洋徳・山本淳一(編著)(2024)「事例で学ぶ教育・特別支援のエビデンスベ
イスト・プラクティス」金剛出版 / 山本淳一(監修)松崎敦子(著)(2020)「0-5歳児 発達が気になる
子のコミュニケーション力育て」学研 / 山崎裕司・山本淳一(編著)(2019)「リハビリテーション効
果を最大限に引き出すコツ第3版」三輪書房 / 山本淳一・武藤崇・鎌倉やよい(編著)(2015)「ケー
スで学ぶ行動分析学による問題解決」金剛出版

【略歴】

東京都立大学・システムデザイン学部・特任教授 / 慶應義塾大学・心理学専攻・名誉教授
明星大学人文学部心理学専攻、筑波大学心身障害学系を経て現職
昭和60年慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻博士課程単位取得(文学博士)
公認心理師、臨床心理士

特別講演Ⅱ

Well-being を支えるソーシャルアクション：女性支援法成立の経緯とその意義

城西国際大学

堀 千鶴子

2024 年 4 月、「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」(2022 年成立、以下、女性支援法)が施行された。同法の成立によって、従来の売春防止法(以下、売防法)に基づく「売春を行うおそれのある女子(要保護女子)の保護更生」を目的とした婦人保護事業は、抜本的に改編された。女性支援法は、女性が日常生活または社会生活を営むにあたり女性であることにより様々な困難な問題に直面することが多いことに鑑み、困難な問題を抱える女性の福祉の増進を図るための施策を推進し、もって人権が尊重され、及び女性が安心して、かつ自立して暮らせる社会の実現に寄与することを目的としている。同法は、女性の well-being を目指したものであり、女性支援にとって法の成立は大きな意義を有している。

「要保護女子」の「保護更生」を目的とした婦人保護事業の限界は、長らく指摘されて来たが、抜本的な見直しはなされる事は無く、女性支援法の成立までには 66 年もの長き年月を要している。同法の成立には、福祉現場からの長年にわたるソーシャルアクションが大きな役割を果たしている。本講演では、女性支援法成立への動向を紹介し、同法成立の経緯とその意義について述べる。

【略歴】

城西国際大学福祉総合学部福祉総合学科 教授、精神保健福祉士、2018 年厚生労働省「困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会」座長、2022 年厚生労働省「困難な問題を抱える女性への支援に係る基本方針等に関する有識者会議」構成員。

シンポジウム

シンポジウム座長

市民と医療系大学の健康実践・教育・研究 コミュニティアクション

東京医療学院大学
豊島 雪絵

第26回日本リハビリテーション連携科学学会学術集会大会のテーマである「人々のQOLと健康に豊かさをもたらす多職種連携」は、本大会の実行委員である東京医療学院大学保健医療学部のリハビリテーション学科理学療法学専攻、作業療法士専攻、看護学科の教員らが、大切に考え共有したテーマです。日弁連は、1980年健康に生きる権利「健康権」を提言しました。これは、憲法の基本的人権に由来し、すべての国民に等しく全面的に保障され、なにびともこれを侵害することができないことであり、国民は本来、国・地方公共団体、さらには医師・医療機関等に対し積極的にその保障を主張することのできる権利であるとしています。また、医の倫理が確立されることを期待するとともに、国民の具体的な権利としての「健康権」が、医療現場をはじめ立法・行政・司法の国政上でも確立されるよう、あらためて提言し、自らもその実現に全力をあげることを誓うと述べています。この視座に立脚し、健康を創造するテーマにふさわしいシンポジウムを検討してきました。

特別講演Ⅱは、女性支援法成立の経緯とその意義について、これまでの活動を通じてご紹介いただきました。この流れを経て、本シンポジウムにご登壇いただくシンポジストの方々は、多摩市において当事者の立場で「人々のQOLと健康に豊かさとは何か」をそれぞれの志を持ち実践されている方々です。市民として、団体として、研究者として情報発信をしていただき、新たな連携を創造していくシンポジウムを目指しています。

2025年は、地域包括ケアシステム元年です。本学術集会のご参集いただいたすべての皆様が、ご自身の住み慣れた地域で、健康に豊かな生活を過ごせるような一助となることを願うシンポジウムになることを期待しております。

【略歴】

東京医療学院大学保健医療学部看護学科 准教授、保健師、看護師、養護教諭、高校教諭
不登校や精神疾患に伴う保健室登校生徒と、思春期精神保健ボランティア“わたこと”を設立。その後、一般社団法人かながわ地域看護ネット“糧”を設立代表理事 認知症高齢者への出張カフェ、不登校児の自宅料理教室などを開催。限界集落、離島における高齢者支援について社会学と看護学の融合するフィールドワークが関心領域。

シンポジウム

シンポジウムパネリスト

QOL と健康に豊かさをもたらす 1 人の市民同士の地域連携

合同会社ライフイズ・一般社団法人 Life is
影近 卓大

「人々の QOL 及び健康の豊かさ」という個別性が高く、客観的な評価指標を提示する事が難しいテーマを考えるにあたっては、「連携」ということが非常に大切になってくると考えています。そもそも連携というのは「同じ目的で何事かをしようとするものが、連絡をとり合ってそれを行うこと」を意味しており、何よりも目的の共有という事を意識しなくてはなりません。誰が誰の QOL 向上や豊かな健康を考え、誰が誰と連携を図っていくのかという事が重要であり、それは専門職同士だけが連携を取れば解決するという事では決してありません。1 人 1 人が持つ市民性が様々な地域場面の中で関係性を構築していく意義や、その市民性と関係性が専門性をあつという間に超越してしまう瞬間がある事を丁寧に考えていく先に、本学術集会大会が掲げるテーマの解像度が少しずつ高まっていくのだと思います。私たちは、福祉を語る時に「道行く全ての人の幸せを考える事」こそが福祉であり、特定の誰かに閉じられてしまっているものは福祉の意味を狭小化してしまうと考えています。だからこそ、医療的ケア児者や重症心身障害児者という障害の重さゆえに地域コミュニティから疎外されがちの方々が地域連携の輪に対等な市民として入っていく事で、障害の重さゆえに引かれてしまう事の多い境界線を曖昧にしていく取り組みを進めています。重症児者が地域の中で名前を覚えられ、まちの人から気にかけてもらえる時間が増えていく事で、少しずつ対等な市民に近づけている様に感じています。それは専門性を発揮する専門職が連携を取るだけでは決して成しえないことであり、地域で暮らす 1 人の市民同士が市民性を発揮しながら、連携を図るからこそ生まれる変容だと感じています。

どの様な状態や背景にあったとしても、地域の中で権利の主体として安心して存在し、まちの様々な場所で連携を図る事で「人々の QOL と健康の豊かさ」が見えてくる様に思います。

【略歴】

合同会社ライフイズ・一般社団法人 Life is 代表。理学療法士、医療的ケア児等コーディネーター、地域プロジェクトマネージャー。「日常生活の景色を多様にする」をビジョンに、訪問看護や重症児者施設、カフェを運営。

シンポジウム

シンポジウムパネリスト

安心できる居場所がもたらす力：不登校の子どもを育てる母親の視点から

当事者 神田 ゆりあ

私は二人の不登校の子どもを育てる母親として、「居場所」の重要性を強く感じています。息子と娘はそれぞれ異なる性格や特性を持っており、不登校の状況下で必要な支援も異なりました。息子は他人からの支援を拒否し引きこもる一方、娘は支援を求めながらも引っ込み思案で一人では行動できませんでした。親として、仕事をしながら子どもたちの生活を規則正しく整える責任は大きな負担で、精神的にも肉体的にも限界を感じることもありました。

学校から紹介された相談先や多摩市の支援施設にも顔を出しましたが、じっくりくるものはありませんでした。そんな中、娘が出会ったフリースクール「ゆめまる」は、子どもたちの「居場所」を探す旅において重要な一歩となりました。最初は緊張しながらも、スタッフや他の子どもたちと関わるうちに、娘はその場を楽しみ、一人でも通いたいという意思を示しました。この経験を通じて私は、「安心できる環境さえ整えば、どの子も自分の居場所を作れる」という気づきを得ました。そして、その「居場所」を見つけるきっかけを提供することが親の重要な役割だと感じています。

「居場所」としての役割を担う場は、単に過ごすだけの空間ではありません。それは子どもたちが安心できる場所であり、その安心感が新しい挑戦への意欲や勇気を引き出すきっかけになります。娘が自分の居場所を持ったことで、次第に他の場所やイベントにも挑戦する姿勢を見せるようになり、親としても「この子は大丈夫」と信じていることができるようになりました。

今回のシンポジウムでは、不登校の子どもを育てる母親としてのリアルな体験を共有し、居場所の運営者や他の参加者に利用者視点の具体性を伝えたいと思っています。また、どんな背景を持つ子どもや家族にも、個別の支援や居場所の多様性が求められることを議論したいと考えています。「居場所」を見つける旅の困難さと、その先に待つ希望について、一緒に考える機会にできれば幸いです。

【略歴】

不登校の子ども二人を育てる母親。教育関係の企業での会社員生活の傍ら子供や大人とのコミュニケーション向上に役立つ教育のための TOC の学習をすすめ、マスターファシリテーターを取得し、それを人に伝える活動も続けている。

シンポジウム

シンポジウムパネリスト

地域と大学の連携による作業療法学生の成長

東京医療学院大学
木村 奈緒子

近年、大学と地域社会との連携が重要視され、文部科学省は大学が地域課題に貢献する意義を強調しています。地域のQOLを向上させるためには、大学が持つ専門知識や技術を活用し、地域のニーズに応えることが求められています。医療や福祉、教育の分野においては、地域課題に多職種が連携して取り組むことが、より効果的な解決策を導くとされています。

東京医療学院大学は開学12年とまだ歴史が浅く、地域貢献は重要な課題となっています。作業療法学専攻の私のゼミでは、地域貢献の一環として、多摩市のフリースクール「ゆめまる」での体験を通じて、学生たちに地域との繋がりを実感させています。「ゆめまる」には不登校や発達障害を持つ子どもたちだけでなく、小学校と並行して通う子供もいます。学生たちは、十分な専門知識がない中でも地域の一員として交流し、障害や疾患の有無に関わらず、地域で生活する人々と触れ合うことの重要性を学びました。

その後、大学の体育館でスポーツフェスティバルを開催し、学生と子どもたちが協力して競技種目を考案しました。ゼミ生たちは、実際に出会った子どもたちに楽しい内容を提供し、集団でのレクリエーションを通じて作業療法の実践に取り組みました。スポーツフェスティバルには子どもたちだけでなく、保護者や兄弟も参加し、総勢50名を超える規模になりました。学生たちは自分たちが考案した種目が多世代にわたって楽しんでもらえたことに大きな達成感を感じました。

この活動を通じて、学生たちは作業療法士としての成長を実感し、地域とのつながりを強化する重要性を認識しました。今後も大学と地域社会のさらなる連携を進め、地域のQOL向上に貢献する活動を続けていきたいと考えています。本報告では、ゼミ生の体験活動を通じて、地域貢献と作業療法学の実践的な学びが学生の成長に繋がる可能性を報告します。

【略歴】

東京医療学院大学講師、東京医療学院大学の前身である専門学校東京医療学院を卒業後、作業療法士として急性期・回復期・維持期・地域の身体障害領域で働く。筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻前期課程修了。

シンポジウム

シンポジウムパネリスト

イエナプラン教育と子どもたちのQOL～イエナスクールゆめまるの取組から～

一般社団法人ゆめまるエデュケーションデザイン イエナスクールゆめまる
代表 新堀 貴子

イエナプラン教育をご存知でしょうか。自由と尊重、自立(自律)と共生を目指すオランダの教育の1つです。イエナスクールゆめまる(以下ゆめまる)はこのイエナプラン教育のコンセプトを基盤に、不登校・学校に行きづらさを抱えている子どもたちが安心と成長、幸せを実感できることを目指したフリースクールとして活動し、5年目を迎えています。

本講演では、このゆめまるがどのような取組を通して、子どもたちのQOL(特に心理的な安定、成長)に貢献しているか、具体的な事例とともに考察します。

1. QOLを高めていると考えられる取組やベースとなる考え方

- ・異学年クラス編成
- ・自己選択、自己決定
- ・対話、遊び、学習、催しというリズム
- ・地域、他者と関わり問題解決を図るプロジェクト学習
- ・保護者同士のつながり ゆめまるFIKA
- ・マルチプルインテリジェンス
- ・スタッフが子ども達を見守るスタンス

2. 学校、地域社会とのつながりからQOLを高めていると考えられる取組

- ・商店街での活動
- ・大学ゼミとのコラボイベント開催(大学生の実習受け入れ)
- ・福祉施設との交流
- ・児童館、市民プール、図書館等の活用
- ・身近な「プロ」との活動
- ・所属小・中学校との連携

不登校児童が全国約30万人とされる今、これらの取組が子ども達のQOL向上に果たす役割は大きいと考えておりますが、取組の紹介で終わらず、「不登校」と呼ばれる子どもたちの思いや願いにも耳を傾けていただける時間にしたいと考えております。共に何ができるか、皆さんで想像し、子ども達の幸せを創造する機会となることを期待しています。

【略歴】

元東京都公立小学校主幹教諭 日本イエナプラン教育専門教員 多摩市不登校対策委員

2020年3月 オランダへの移住を目指し教員を退職したもののコロナ禍で断念。その後、イエナスクールゆめまるを開設。

2024年10月 一般社団法人ゆめまるエデュケーションデザインとして法人設立。

シンポジウム

シンポジウムパネリスト

みんなのリバティを拠点にした地域の子供たちと保護者への支援

みんなのリバティ

渡邊 江身子

みんなのリバティは、多摩市諏訪名店街の中にある居場所カフェです。日中は、不登校の子供たちが、思い思いの時間を過ごしています。基本的なルールを守れば、何をしても OK としています。利用する子供の中には不登校だけではなく、家庭の様々な問題を抱えた子もいます。夕方になると学校から帰ってきた小中学生も合流し自宅に帰る前のひと時を過ごします。利用する子供の中には既存の学校という枠組みの中では息苦しく、個性を受け入れてくれる場所を探して、リバティにたどり着いた子もいます。リバティはそんな子供たちを受け入れ、安心・安全な場を提供しています。また、お年寄りが散歩のついでにコーヒーを飲みに来たり、予約をすれば一般の方も手軽な値段でランチを食べる事ができます。

子ども食堂の役割もあり、昼食は子供に関しては 0 円で提供し、夕飯も 150 円で提供しています。また原価 + α で提供する夕飯用の弁当は、共働きの保護者にとっても喜ばれています。発達に問題を抱える子供の中には口腔に感覚過敏の問題を抱えている子がいます。寄付された食材や限られた食費の中から、彼らが食べてくれるメニュー、食形態を工夫して毎日臨機応変に提供しています。かつて食べられなかったものが、リバティの食経験を通して食べられるようになり、自宅での食事につながったケースもあります。

私自身も長男長女の子育てで悩み苦しかった時代がありました。子供の個性の理解や、それぞれの性別での発達や課題にぶつかる日々でした。しかしその経験の中で大きな学びがあり、今ではその経験を生かして悩める保護者の助けになりたいと考えています。現在数カ月に 1 度リバティを利用する子供たちの保護者の集いを開いています。子育ての悩みや迷いを参加者で情報共有し、苦労を共有し笑ったり泣いたりしています。

【略歴】

社会福祉法人こぼと会 みんなのリバティ所属。子どもを含めたみんなの居場所カフェのスタッフ。飲食店経営の経験を活かし、食事や弁当の提供だけでなく、利用者、その家族の相談に乗っている。

市民公開講演

眠りは健康の根幹！おすすめしたい快眠8ステップ

東京家政大学
岡島 義

眠りには、質・量・リズムの3つの柱があります。この3つの柱を整えることで、快適な睡眠がもたらされ、日中のパフォーマンスを含めた人生のクオリティを高めることができます。これまでの研究によって、眠りは、痛みなどの身体面、うつ・不安などの精神面、心配や記憶などの認知面、衝動・多動などの行動面、生産性などの経済面といったように、多岐に良い影響を与えることがわかっています。

本講演では最新の睡眠研究の一端を紹介するとともに、それらの研究成果と私の臨床経験に基づく快眠8ステップを紹介します。

【略歴】

2003年 日本大学文理学部心理学科卒業。2008年 北海道医療大学大学院心理科学研究科博士課程修了（〔博士（臨床心理学）取得〕）。睡眠総合ケアクリニック代々木主任臨床心理士、早稲田大学人間科学学術院助教を経て、東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科教授（現職）。

【資格】

公認心理師、臨床心理士、日本睡眠学会専門心理師、認知行動療法師、認知行動療法スーパーバイザー、産業カウンセラー

【社会活動】

日本睡眠学会評議員、日本時間生物学会評議員、日本認知・行動療法学会理事、日本ストレスマネジメント学会理事、日本行動医学会評議員、日本健康心理学会代議員、日本不安症学会評議員

学会企画セミナー

すべての子どもたちへ、こころに残るワウワクドキドキ体験を届けよう

所属
安田 一貴

重度の障がいのある子どもとその家族は、生きるための医療が優先され「自由に遊ぶことや、様々な体験をする機会」が制限されやすい。それらの子どもを対象に「リハビリテーション、写真、遊び」の知識と経験を活かし、事業に取り組んでいる。それらの活動について紹介する。

『笑顔の向こうに繋がる未来プロジェクト PLAY&PHOTO Studio』

病気や障がいがあり、写真スタジオへ行くことが難しい子どもとその家族のスペシャルニーズに寄り添い、心に残る写真撮影体験を届ける活動である。自宅や施設へ出張し、専用機材を使用しスタジオクオリティの写真撮影を実施する。理学療法士やホスピタルプレイスペシャリストの知識経験を活かし、病気や障がいの特性に合わせ、医療的ケアやリスク等に配慮し、安心できる場所、居心地の良い空気感を創り、その子らしさ、その家族らしさを撮影する。

『遊びリパークリノアたまプラ』

重症心身障害児や医療的ケア児を対象とした児童発達支援・放課後等デイサービスである。重い障がいや医療的ケアがあっても、おもいっきり遊ぶことができる「あそびば」づくりに取り組んでいる。

障がいのある子どもは、早期から様々な訓練を積み重ねていく。身体機能を獲得することは大切な目標であるが、本来、機能を獲得することだけがゴールではない。その先にある生きることを楽しむ豊かな経験を積むことが大切である。訓練と並行して、環境を整えることや、介助や他動的であっても、様々な経験をする楽しさや、チャレンジをしてみたい、という気持ちを育てることが大切である。そのためには、専門職の知識経験は手段の1つでしかなく、様々な分野の力をかけ合わせる「専門知識×○○」という視点が大切である。医療福祉分野に限定せず、様々な分野と連携しながら、○○に何を入れることができるか、その幅の広さが子どもの成長発達に欠かせない新しい体験を創り出す鍵となる。

【略歴】

- 2009~11年 日本大学医学部附属板橋病院 リハビリテーション科
- 2011~14年 JICA 青年海外協力隊ウズベキスタン共和国 血液学小児病院
- 2015~16年 神奈川県立こども医療センター リハビリテーション科
- 2016~21年 国立成育医療研究センター病院 リハビリテーション科
- 2017年~ 笑顔の向こうに繋がる未来プロジェクト PLAY&PHOTO Studio 設立
- 2021年~ 遊びリパークリノアたまプラ開所

ラウンドテーブル (ハイブリット開催)

Telerehabilitation と多職種連携の可能性を探求する

特定非営利活動法人日本テレ・リハビリテーション研究所

小河 周平

ICT を活用する場が社会の中で格段に増加しており、保健医療の分野においてもオンライン診療の整備が進んでいる。しかし、リハビリテーション領域におけるオンラインサービスは供給体制が整備されていない。

諸外国ではオンラインでのリハビリテーションは、Telerehabilitation という名称のもと普及しており、対面でのリハビリテーションには簡単に通うことのできない障害者や障害児、その家族等にとって有益な支援となっている。

私は、2021 年から、障害者や障害児、その家族等に対する支援の新たな選択肢の一つとなれるように、リハビリテーションに携わる多職種（作業療法士・理学療法士・言語聴覚士・看護師・社会福祉士・公認心理師・精神保健福祉士・弁護士・大学教員等）と共に、Telerehabilitation の研究と支援を行っている。

今回のラウンドテーブルでは、「Telerehabilitation と多職種連携の可能性を探求する」というテーマを掲げている。

皆様と共に、Telerehabilitation の普及と発展に向けて、多職種がどのように連携し支援体制を構築していけるのか。また、この分野における可能性や課題について議論を深めていきたいと考えている。どうぞよろしくお願いいたします。

【略歴】

2023 年 3 月 筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群リハビリテーション科学学位プログラム博士前期課程修了

2024 年 12 月 特定非営利活動法人日本テレ・リハビリテーション研究所 設立

第26回大会 日本リハビリテーション 連携科学学会 シンポジウム



人々のQOLと健康に豊かさをもたらす多職種連携

日時 2025年 3月 16日 日 14:10~15:40
会場 東京医療学院大学 多摩市落合4-11

シンポジウム

市民と医療系大学の健康実践・教育・研究
コミュニティアクション

シンポジスト (5名)

- ♡社会福祉法人こばと会 リバティ事業部
居場所支援スタッフ 渡辺 江身子 氏
- ♡合同会社ライフイズ・一般社団法人Life is 影近 卓大 代表
- ♡一般社団法人ゆめまるエデュケーションデザイン 新堀 貴子 代表理事
- ♡多摩市のコミュニティサービスを活用する市民代表 神田 ゆりあ 氏
- ♡東京医療学院大学 作業療法学専攻 木村 奈緒子 講師
- ⊗座長 豊島 雪絵 (東京医療学院大学 看護学部 准教授)
- ⊗スーパーバイザー 堀 千鶴子 (城西国際大学 福祉総合学部 教授)

詳しくは、裏面 または 学会Webサイト をご覧ください。

学会Webサイトは
こちら⇒



お問い合わせ : 第26回大会実行委員会 Email reharenkei26@gmail.com

シンポジストのご紹介

社会福祉法人こぼと会 渡邊 江身子 氏

子どもの居場所カフェのスタッフ。自身の子育てと飲食店経営の経験を活かし、食事を提供する際に、感覚過敏の子供でも食べられるご飯を提供している。安心安全の居場所づくりに挑戦。

多摩市民 当事者 神田 ゆりあ 氏

多摩市在住、不登校児2人を育てる当事者。子供たちの居場所を模索しながら多摩市の様々な施設、サービス利用の経験がある。地域での様々な繋がりを大切に、経験を活かしたいと考えている。

東京医療学院大学 木村 奈緒子 講師

作業療法士。子供の不登校を経験し、地域との連携を痛感。大学教員として地域と連携し、多摩市で暮らす人々の健康に貢献できることを模索している。

合同会社ライフイズ 影近 卓大 代表

理学療法士。多摩市に重度障害児・者を対象とした通所支援事業所をはじめ、地域の様々なニーズに応じて施設を展開する。駄菓子屋やジューススタンドを併設し、地域人々と障害者が自然に交流できる場を提供している。

一般社団法人ゆめまる エデュケーションデザイン 新堀 貴子 代表

元小学校教師。オランダのイェナプラン教育を教室で実践したことをヒントに、フリースクールを開設。小中学校との提携を大切にしながら、子供達に様々な学びと経験を提供している。

参加費と申込方法

♥参加費 本会会員、非会員、市民 : 事前申込 5000円、当日申込 6000円
大学院生、当事者 : 事前申込 2000円、当日申込 3000円
学生 : 無料

※学会開催期間(3/15,16)を通しての参加費のお支払いをお願いします。シンポジウム以外の内容もご参加いただけます。

※当事者は介助者1名まで無料となります。

⊗申込方法 事前申込) 右のQRコードから学会Webサイトにアクセスしてお申込みください。
当日申込) 当日会場にて受付をお願いします。

学会Webサイト



第26回リハビリテーション連携科学学会 主催

市民公開講座

眠りは健康の根幹！ おすすめしたい快眠 **8** ステップ



日々を元気に過ごすためには、睡眠が大切です。
この講義では、心地よく眠るためのポイントについて、わかりやすくお話ししていきます。

講師 岡島 義氏
東京家政大学 人文学部 教授



日時 2025年 **3月15日** (土)
15:00 ~ 16:00

会場 東京医療学院大学
東京都多摩市落合 4-11

参加無料

事前申し込み不要



第26回リハビリテーション連携科学学会は
障がい当事者の方にもご参加いただけます ※有料

詳細は右のQRコードにアクセスし
学会 Web サイトにてご確認ください



お問い合わせ：第26回リハビリテーション連携科学学会 実行委員会

Email: reharenkei26@gmail.com

HP: <https://reharenkei26.gakujuutsuweb.net/>

ラウンドテーブル

開催日時 2025年3月15日(土) 16:10~17:10

テーマ

Telerehabilitation と多職種連携の可能性を探求する



開催方法：対面（東京医療学院大学）とオンラインのハイブリッド

参加費：無料 参加はどなたでも可能です。

参加登録：下記の URL や QR コード、もしくは日本リハビリテーション連携科学学会のホームページより、3月1日(土)までに事前登録をお願いいたします。

<https://forms.gle/A5VrvUS2C5KQ6UV9>



ご不明な点などありましたら、下記のアドレスまでご連絡をお願いいたします。

E-Mail : j.telereha.ri@gmail.com (小河)